

平成 21 年 6 月 1 日

第 52 回日本ばら切花品評会審査講評

審査長 土井 元章

(京都大学大学院農学研究科)

1. 審査経過

日本ばら切花協会(杉本重幸会長)主催の第 52 回日本ばら切花品評会は、本年度より再度関東に会場を移し、神奈川県横浜新都市センター(そごう横浜店)9階催事場を会場として、平成 21 年 5 月 29 日(金)から 5 月 31 日(日)までの 3 日間開催された。例年より 1 ヶ月半遅く、母の日と父の日のちょうど中間の開催となった。晩春であったことから、山形や長野といった夏場の主力産地からの出展も期待されたが、高冷地からの出品数はそれほど多くはなかった。平成 20 年度は重油価格が乱高下し、高冷地ではヒートポンプの導入もそれほど進んでいないことから、春先にどの程度加温するか判断が難しかったと思われるが、母の日や父の日に合わせたとなるとちょうど端境期となってしまったのかもしれない。総出品数は 388 点と前年よりも 45 点少なく、第 50 回 442 点、第 51 回 433 点とここ数年出品数が減少してきていることは否めない。5 月 29 日は搬入、展示、審査の後一般公開、翌 5 月 30 日は 15 時まで一般公開した後翌 31 日正午まで展示品の販売が行われた。

品目別内訳は、スプレー 119 点と前年度より 31 点増えているのに対して、スタンダードは 269 点と 76 点もの大幅な減少となった。スタンダードの色別内訳は、赤系 51 点、ピンク系 112 点、黄・オレンジ系 50 点、白・クリーム系 26 点、その他 30 点である。赤は‘ローテローゼ’の出展がかなり減り、品種が乱立状態にあった。スタンダードでは‘アバランチェ’、‘スイートアバランチェ’等‘アバランチェ’系の品種が主力となった観がある。スプレーでは、赤系 16 点、ピンク系 51 点、黄・オレンジ系 27 点、白系 25 点であった。

品評会の審査は 5 月 29 日 15 時から 17 時までの 2 時間をかけて行い、審査長を京都大学の土井元章が務め、計 10 名の審査員により各賞を選考した。本年度お世話いただいた当番県は茨城県で、副審査長として茨城県農業総合センター専門技術指導員の田場昭男が務め、同じく茨城県花き総合指導センターの内藤和也、千葉県暖地園芸センターの柴田忠裕、神奈川県農業技術センターの原靖英が行政・試験研究機関を代表して審査した。卸売市場からは、大田花きの森好明、FAJ の飯山重が、小売を代表して JFTD の馬場政好が、フラワーデザイナーを代表して日本フラワーデザイナー協会の中村史子、(株)ディノスの雨笠雅博が審査員を務めた。審査に先立ち、日本ばら切花協会の神生顧問より出展数とその内訳、および優良賞、特別賞の概数について説明があった。また、審査長の土井より審査の進め方と留意点について説明した。審査員は 3 グループに分け、それぞれスタンダードピンク系、ピンク系以外のスタンダード、スプレーを審査した。まず、優良賞候補を出品数の 25%の数にあらかたなるように選び出し、その上で審査グループが入れ替わって確認して一部候補を入れかえた上で、特別賞候補を優良賞の中からそれぞれスタンダードピンク系 9 点、ピンク系以外のスタンダード 11 点、スプレー 9 点を選び出した。再度審査員グループが入れ替わって、受賞候補全体の

確認を行った。したがって、全審査員が全体をみて優良賞、特別賞を確認したことになる。その上で、選ばれた特別賞 29 点を一堂に集め、特に優れた出品をスタンダードから 3 点、スプレーから 2 点選び出し、その中から農林水産大臣賞、生産局長賞、茨城県知事賞、茨城県議会会長賞と順番に擬賞していった。なお、特別賞 29 点中で同じ生産者からは 2 点以内とすることをあらかじめ申し合わせたか、最初の選考の段階で 3 点以上特別賞に選ばれた生産者はいなかった。擬賞については全審査員で合議の上決定した。

各賞擬賞した上で、杉本重幸会長、榎本雅夫副会長、山本稔副会長他と審査員が集まり審査講評、意見交換を行った。

2. 審査結果

今回農林水産大臣賞には、審査員全員の合意のもと、奈良県平群町の藤枝仁が氏出展したグリーン（黄緑）のスプレーである‘レモネード’を擬賞した。グリーンのスプレーバラは他にも数点出展があったが、本品が圧倒的にボリュームに優れ、また花色も蛍光色を感じさせる独特なグリーンで審査員の目を引いた。利用する立場からも、小枝にしていかに使い勝手がよさそうで、卸売市場や小売店からの審査員、デザイナーの審査員から高い評価を得た。ただし、切り花の生産性はそれほど高くない品種である。

昨年‘スイートアバランチェ’で農林水産大臣賞を受賞した和歌山県御坊市の山本修功氏が、今回は‘アバランチェ’で生産局長賞の受賞となった。今やスタンダードの主流となった‘アバランチェ’、‘スイートアバランチェ’、‘ピーチアバランチェ’の出展の中でも氏の出品は花も大きく、葉と花のバランスも優れ、揃いもよく、ひときわ抜き出ており、栽培技術の高さがうかがえる。

茨城県知事賞には東京都町田市の簗口弘一氏出展の‘テレサ’を擬賞した。花が大きく、‘テレサ’独特の濃いピンクが鮮やかに発色しており、照り葉の緑とのコントラストも最高であった。同氏の出展で（財）日本花普及センター会長賞を受賞した‘ノブレス’も花が非常に大きく、一見‘ノブレス’ではないのではと思うほどの出来映えであり、氏の栽培技術の高さがうかがえた。‘テレサ’も含めスタンダードの主力品種であった‘ノブレス’や‘サフィーヤ’は、昨今の巨大輪の品種に比べて品評会ではどうしても見劣ってしまう傾向にあるが、これだけ作りこなされてしまうと見慣れた品種なのでかえって安心感が出て、流行に踊ってばかりではいけないと思ってしまう。

茨城県議会議長賞には、静岡県島田市の嵐口茂氏のピンクのスプレーである‘サントワマミー’を擬賞した。この出品も大変ボリュームがあり素晴らしい出来映えであった。上記以外で今回特徴的な点は、変わり咲きや花色に特徴のあるいくつかの出品が特別賞に選ばれたことである。例えば、（株）ディノス賞を受賞した‘ストロベリーモンローウオーク’（長野県飯島町、森谷匡彦氏出展）はクラデーションのある花色のスプレー品種で、マスとして使うといった従来とは全く違った使い方でバラをデザインできるとの評価であった。また、（社）日本フラワーデザイナー協会理事長賞の‘レモンランキュラ’（静岡県静岡市、矢入英明氏出展）はランキュラスの花を彷彿させる盃状抱え咲きの黄色のスタンダードで、中央の雄ずい群が完全な緑色を呈して葉化した変わり咲きとなっている。千葉県花き園芸組合連合会長賞の‘エクレール’（茨城県石岡市、神納賢一氏出展）は、緑色スプレーの変わり咲きで、花序にはほとんど葉は見られず、枝もののような使い方でのアレンジもできそうである。一方、（社）日本花き生産協会会長賞の‘フランソワ’（千葉県、榎本雅夫氏出展）は淡いピンクのカップ咲きーロゼット咲きの大輪スタンダードで、デザイナーの審査

員が強く押した出品であった。花卉が弱いため夏場はヒートポンプによる除湿が必須とのことである。このような変わり咲きやオールドローズ系の品種の出展は従前より見られたものの、出荷量が少なく日持ちにも問題のあることからこれまで特別賞の対象からは外されていたところがある。今回、流通関係やデザイナーの審査員の支持で何点かが選ばれたことは、バラにおける多様性をより強く評価するようになってきているあらわれではないかと考えられ、生産者も是非ともこのような流れは意識してもらいたいところである。

3. 審査員の意見

審査終了後行った審査講評では以下のような意見が出された。

品種が益々多様化しており、バラという品目の幅の広さ、奥の深さに改めて感心させられたというのは、審査員一同一致した意見である。今回の品評会は晩春の開催ということで比較的湿度も高くなってきており、栽培ハウスの環境管理が難しく、また輸送時のいたみや灰色カビ病の発生も心配されたにもかかわらず、これらの障害が皆無というわけではなかったが、総じて良い状態で展示が行われていたとの評価を得た。これは、前年の指摘事項が活かされたことに加え、品評会前に晴天が続いたことで、ハウス内の湿度環境が適正に管理できていたことによると思われる。今後、入梅とともに湿度管理が難しくなり、日持ち性も低下してくるので、ヒートポンプを導入した生産者にとっては是非ともその機能をうまく活用されたい。

また、今回特別賞を受賞した中には、変わり咲きやオールドローズ系の品種もあったが、品種の収量性は必ずしも十分に審査に反映できていないことも指摘された。ただし、生産性とは単に切り花本数ではなく、どれだけの投入に対してどれだけの価値を生むかで評価すべきであって、今回収量性が低い品種であっても商品としての高い評価を得たことは、生産者においても一つの注目すべき視点ではないかと考えられる。今後は販売価格に商品としての評価がいかに反映されるかが重要であろう。

もう一つ審査員の間から出された意見として、これだけ多様ですばらしいバラが展示されている品評会であるにもかかわらず、一般公開はわずか1日あまりと短く、これではバラ切り花のPRと販売促進にはあまり繋がらないのではないかという意見があった。品評会の一般への事前PRや会場借上げ等の経費面での制約もあるが、是非この点は今後の改善を協会関係者にご検討いただきたいところである。ちなみに、次年度は西武ドームで毎年開催されている「国際バラとガーデニングショー」での品評会開催も検討中とのことである。

審査に関しては、一部出展技術のさらなる工夫が必要との意見があった。また、最上段の切り花がみえにくいこと、今回同一品種が散らばって置かれていたことで比較が難しかったことなど展示の手法上の問題点が指摘された。

日本ばら切花協会の生産者との意見交換の中では、ヒートポンプの導入によりこれまで商品化が難しかった品種でも市場出荷できるようになり、是非ともこのような品種をうまく使ってもらえないかとの要望が出された。これらの品種は、変わり咲きであったり香りのすばらしいオールドローズであったりするので、生産者の努力が無にならないよう、流通やデザイナーの皆様の協力をお願いしたいところである。

生産者は、需要の低迷に加え、重油や生産資材の高騰の中で、血のにじむような努力をしてバラ生産を続けている。このような努力を無駄にしないよう、関係者一同連携してさらなるバラ産業の発展に繋げたいものである。

4。審査結果

厳正な審査の結果、優秀賞（特別賞）29 点、優良賞 97 点を選出し疑賞しましたので、これらに基づいて表彰されますようお願いして審査報告といたします。